

# 第4回HOPE Meeting 終了報告書

所属・学年	総合理工学研究科 化学環境学専攻、 博士後期課程 2 年
プログラム名	第 4 回 HOPE Meeting
プログラム期間	平成24年3月7日(水)～11日(日), (3月6日(火):受付,オリエンテーション)
開催地	つくば国際会議場
参加者	アジア(29 カ国)の博士後期課程の学生 110 名程度(日本人 25 名程度)
使用言語	英語

## 1: プログラムの概要

2008年度から始まったJSPS主催のHOPE Meetingは今回で4回目をむかえ、世界25カ国から博士課程の学生約110名(日本人25名程度)が集まりました。プログラムの概要としては、ノーベル賞受賞者による講演、そしてノーベル賞受賞者とのフリーディスカッション、自身の研究のポスター発表、グループプレゼンテーション、研究施設見学、文化プログラムの体験等です。

## 2: 事前準備の内容

### ①ポスター発表

参加者は各自の研究内容をポスター発表するために、JSPS側が定める期限にのっとり、英語で研究内容の概要をA4 1枚で書いて提出し、かつポスターを作成する必要があります。

### ②ノーベル賞受賞者への質問

2週間くらい前に、ノーベル賞受賞者の先生へ質問したいことを述べるように、案内がきます。これによって、ノーベル賞の先生とのディスカッションのグループが決まるみたいなので、ディスカッションしたいノーベル賞受賞者への質問を考えるといいと思います。

### ③グループプレゼンテーション

参加者は予め、1チーム8人—10人程度のグループに割り当てられます。そのグループで最終日に15分のグループプレゼンテーションを行います。トピック、発表形式は自由で、グループメンバー達でディスカッションして決めますが、Meeting期間中は他のプログラムがあるために、事前にある程度、どんなことを発表したいのか、各自の意見や考え、特徴などを把握する必要があります。HOPE Meetingの2週間くらい前から、HOPE MeetingのWeb上の特別サイトにアクセスできるようになり、そのディスカッションボードで議論できるようになります。しかし、毎回、ネット上でログインをしないといけず、手間がかかるのと①や②の準備、また海外の学生は出発準備などに取り掛かりだしたために、ほとんどのチームは発表のメインテーマは決めることは出来なかったようです。私は毎回、このログインをする作業が面倒に感じたために、メンバーのE-mailに一斉メールをすることで、メールで議論を進めるようにしました。これによって、頻りに意見のやり取りが行われ、テーマについては候補が何個か出たり、ビデオを使って発表しようということまで決めることができました。

## 3: プログラム期間中の内容

大きく分けて、次の7つに大別される。

### ①ノーベル賞受賞者達による講演

日本人のノーベル賞受賞者の江崎玲於奈氏、野依良治氏、根岸英一氏、鈴木章氏の4名と海外からはRoderick MacKinnon氏（2003年 ノーベル化学賞）、Dan Shechtman氏（2011年 ノーベル化学賞）、Sir John E Walker氏（1997年 ノーベル化学賞）、またGunnar ÖQUIST氏（前スウェーデン王立科学アカデミー事務局長）、東京大学の相田卓三教授による講演が行われました。いずれも50分の講演と10分間の質疑応答であり、非常に貴重な講演のために、活発な質疑応答が行われました。質問は、ノーベル賞を受賞された研究内容に関する直接的なものから、キャリアに対する考えや研究の哲学など幅広い内容に及びました。どんな質問にも講演者の先生は丁寧に、厳しく答えて下さったのが印象的でした。この質疑応答ではRoderick MacKinnon教授がハーバード大学からロックフェラー大学に移った際におけるキャリアと研究に対する考えなど非常に考えさせられる内容が多かったです。いずれの講演者の先生の発表も魅力的でしたが、特に私が印象的だったのは2011年にノーベル化学賞をとられたイスラエルのDan Shechtman教授による「The Discovery of Quasi-Periodic Crystals」と題する講演でした。本講演で、Shechtman教授は準結晶についての定義から、その発見に至る過程、またLinus Pauling先生との議論などのエピソードを準結晶について、特別な知識をもっていない私たち参加者に向けて、ものすごくわかりやすく講演してくださいました。この聴衆を意識した講演スキルは非常に考えさせられました。



鈴木 章教授の質疑応答

### ②講演者の先生とのグループディスカッション

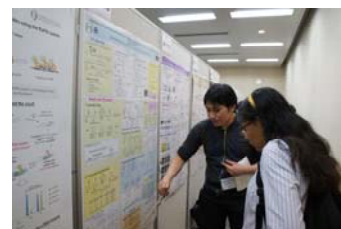
会期中の午後は3回に渡って、ノーベル賞受賞者とメンター（ノーベル賞受賞者の先生と参加者の間をつなぐ若手の研究者）の先生を参加者15人ぐらいで取り囲んで、フリーディスカッションを行いました。はじめは、予め提出した質問にノーベル賞受賞者が答えていくという形で始まり、途中からは何でも自由に質問してもよく、ノーベル賞受賞者の生い立ちから、未来の科学に対する考察、地球環境に化学がどのように貢献できるか等、ざっくばらんに質問する事ができました。このディスカッションの後はノーベル賞受賞者の先生と2ショット写真をとるいい機会でもあり、私もDan Shechtman教授とともりました。



Dan Shechtman教授との写真

### ③Participantによるポスター発表

1回2時間のポスター発表を前半と後半の2回にわたって行われました。私は参加するまで、ノーベル賞受賞者が聞きに来られるのかと思っていましたが、聞きに来られたのは運営委員やメンターの先生方でした。ノーベル賞受賞者がポスター発表に聞きに来られなかったのは残念でしたが、国内の第一線にいる研究者に向けての説明と各国の参加者に向けての発表と質疑応答は非常に刺激的でした。特に、各国の学生たちの専門のバックグラウンドは化学だけでなく、分子生物学や神経科学などと非常に幅広かったために、説明にも工夫をする必要があり、刺激的でした。また、メンターの先生も研究の第一線におられる方ばかりであったために、質問もするべく非常に勉強になりました。この機会を通して、同じグループ以外の参加者の研究内容を知ることができ、かつ友達を作る機会にもなりました。



### ④グループプレゼンテーション

最終日の午前中を使って、全員の前で15分のグループプレゼンテーションを行いました。期間中の初めはどこのグループも議論がごちなかつたものの、最後の方はいずれのチームもメンバー間で打ち解けてきたために、前日は半分くらいのチームが24時を過ぎてグループプレゼンテーションの準備を行っていました。私のチームは、もう一人の日本人、シンガポール人、インド人、ベトナム人、エジプト人、韓国人の7人からなっており、初日の晩から、私の部屋に集まって、メールでのディスカッションの続きを行っていました。私のチームはパワーポイントとビデオを使っての発表を考えていたために、その制作を同時に進める必要があり、非常に困難でしたが、この時に夜遅くまで、あーでもないこーでもないと言いつつも、遅くまで議論したことがメンバー間の絆を強めたと思います。発表もパワーポイントとビデオを使って、グリーンケミストリーやHOPE Meetingについてのメッセージをうまく出せたと思います。特に、ビデオについてはいろんな参加者からすごく高い評価を頂いた事はこれからも忘れる事はないと思います。



### ⑤研究施設見学

3日目の午後には、研究施設の見学をするために、全体を2グループに分けて、KEK(高エネルギー加速器研究機構)と医薬品企業であるEisaiの研究所を見学させて頂きました。特に、Eisaiでは、普段はめったに入ることのできない製薬企業の研究所の中をじかに見学でき、かつ研究員の方ともディスカッションすることができました。また、50サンプルを一度に全自動で測定できる700 MHzのNMRを用いて、その構造の同定を行っているのが印象的でした。研究所の中は基本、極秘のために、見学にはEisaiの社員らが6人ぐらい連れ添われていたことから、その重要性が伺えました。



### ⑥文化プログラム

文化プログラムとして、コンサートと日本文化の体験コースが組み込まれていました。コンサートでは、「ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル」や「ヨハン・ゼバスティアン・バッハ」を上野直毅氏の演奏によるチェンバロを1時間にわたり、鑑賞することができました。また、日本文化の体験コースでは、「Japanese Calligraphy」, 「Wearing Kimono」, 「Ikebana(flower arrangement)」, 「Tea Ceremony」の4つの中から、各自の希望する2つのコースを体験することができ、私は「Tea Ceremony」, 「Ikebana」を体験しました。特に、「Tea Ceremony」では、他のグループのメンバーと近くに座ることになり、タイ、インドや韓国からの参加者にお茶の作法とその意義を身振り、手振りをまじえて説明しながら、交流をはかりました。「Tea Ceremony」には、Roderick MacKinnon 教授も参加されており、茶道について興味深そうにして体験されていました。しかし、プログラム後には参加者からの写真せめにあっており、困惑されていた様子も印象的でした。



### ⑦東京観光

最終日のClosing Ceremonyが終了後には、バスで筑波から浅草へ向かい、Roderick MacKinnon 教授との写真

イツリーなどの東京の名所を周ったのちに、江戸東京博物館を観光しました。最終日で、期間中のスケジュールがきつかったために、参加者の大部分はかなり疲労しており、バスの中ではみんな寝ていました。私もグループプレゼンテーションの準備を明け方まで、グループメンバーとしていたために、バスの中ではほとんど寝ていました。

#### 4: 感想

「スケジュールがタイトすぎて、かなり疲れたものの、ものすごく充実していたな」というのが僕の感想です。こんなに充実していた1週間はこれまでの人生で初めての経験だと思います。HOPE Meeting中は朝起きてから、夜寝るまできっちりとプログラムが組み込まれており、かつその内容も充実しているために、心身ともに普段の生活では経験できないものでした。ノーベル賞受賞者の講演とディスカッションでは、普段めったに会えない、話せないノーベル賞受賞者の先生と研究内容から、研究哲学、キャリアに渡って、幅広く、深く議論できた事は私の人生の価値観に大きく影響を与えてくれました。また、このHOPE Meetingの魅力はノーベル賞受賞者との関わりだけでなく、参加者にもあると思います。日本だけでなく、アジア全域から選ばれた約100名の参加者との出会いも刺激的でした。ポスター発表でのお互いの研究のディスカッションから、グループプレゼンテーションでの共同作業、そして食事の時でのお互いのラボの話、研究環境から各自の自慢話へと非常に多岐に渡ったのは今でも鮮明に覚えています。このような密閉された環境でバックグラウンドの異なるメンバーが集まり、議論し、絆を深める事の面白さは表現しがたいです。そして、この素晴らしいHOPE Meetingを盛り上げ、運営してくれたJSPSのスタッフには本当に感謝しております。参加者は100名以上もいるのに、なんとJSPSのスタッフの方は参加者の名前を覚えようと努めてくれていました。これがわかった時は、ただ驚くしかありませんでした。最後になりましたが、このような機会を与えてくれたJSPSと留学生交流課の皆さま、そして浅学非才の自分を日頃、辛抱強く、ご指導して下さいている小坂田耕太郎教授と竹内大介准教授をはじめとしたスタッフの皆さまに心から感謝いたします。



Farewell Partyで、修了証をメンバー達と。



Sir John E Walker 教授との写真